

【二】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(解答は全て句読点、記号も一字に含める。)

① 私の宅の庭は、わりに背の高い四つ目垣<sup>\*1</sup>で、東西の二つの部分に仕切られている。東側の方のは応接間と書齋とその上の二階の座敷に面している。反対の西側の方は子供部屋と自分の居間と隠居部屋とに三方を囲まれた中庭になっている。この中庭の方は、垣に接近して小さな花壇があるだけで、方三間<sup>\*2</sup>ばかりの空地は子供の遊び場所にもなり、また夏の夜の涼み場にもなっている。

② この四つ目垣には野生の白薔薇をからませてあるが、夏が来ると、これに一面に朝顔や花豆を這わせる。その上に自然に生える鳥瓜も擲んで、ほとんど隙間のないくらいに色々の葉が密生する。朝戸をあけると赤、紺、水色、柿色さまざまの朝顔が咲き揃っているのはかなり美しい。夕方が来ると鳥瓜の煙のような淡い花が繁みの中からウ覗いているのを蛾がせせりに来る。薔薇の葉などは隠れて見えにくいであるが、垣根の頂上からは幾本となくオ勢いの好い新芽を延ばして、これが眼に見えるように日々生長する。これにまた朝顔や豆の蔓がからみ付いてどこまでも空へ空へとギンとっているように見える。

③ この盛んな勢いで生長している植物の葉の茂りの中に、枯れかかったような薔薇の小枝から煤けた色をした妙なものが一つづら下がっている。それは蜂の巣である。

④ 私が始めてこの蜂の巣を見付けたのは、五月の末頃、垣の白薔薇が散ってしまったって、朝顔や豆がやっと二葉の外の葉を出し始めた頃であったように記憶している。花の落ちた小枝を剪っているうちに気が付いて、よく見ると、大きさはやっと拇指の頭くらいで、まだほんの造り始めのものであった。これにしっかりとしがみ付いて、①黄色い強そうな蜂が一匹働いていた。

⑤ 蜂を見付けると、私は中庭で遊んでいる子供達を呼んで見せてやった。都会で育った子供には、こんなものでも珍しかった。蜂の毒の恐ろしい事を学んだ長子等は何も知らない幼い子にいろんな事を云って警めたりおどしたりした。自分は子供の時に蜂を怒らせて耳たぶを刺され、さんしちの葉をもんですりつけた事を想い出したりした。あの時分はアンモニア水を塗るといような事は誰も知らなかったのである。

⑥ とにかく②こんなところに蜂の巣があつてはあぶないから、落してしまおうと思ったが、蜂の居ない時の方が安全だと思つてその日はそのままにしておいた。

⑦ それから四、五日はまるで忘れていたが、ある朝子供等の学校へ行った留守に庭へ下りた何かのついでに、思い出して覗いてみると、蜂は前日と同じように、軀を逆様に巣の下側に取り付いて仕事をしていた。二十くらいもある

うかと思う六角の蜂窩\*5 ほうかの一つの管に継ぎ足しをしている最中であった。六稜柱\*6 ろくりようちゅうけい形の壁の端を顎あごでくわえて、ぐるぐる廻って行くと、壁は二ミリメートルくらい長く延びて行った。その新たに延びた部分だけが際立きわだって生々しく見え、上の方の煤けた色とは著ちしくちがつているのであった。

8 一廻り壁が継ぎ足されたと思うと、蜂はさらにしっかりとからだの構えをなおして、そろそろと自分の頭を今造った穴の中へ挿し入れて行った。いかにも用心深く徐々そろそろと身体を曲げて③頭の見えなくなるまで挿し入れた、と思うと間もなく引き出した。穴の大きさを確かめて始めて安心したといったように見えた。そしてすぐに隣の管に取りかかった。

9 私はこの歳になるまで、蜂のこのような挙動を詳しく見た事がなかったので、強い好奇心に駆られて見ているうちに、この小さな昆虫の巧妙な仕事を無残に破壊しようという気にはどうしてもなれなくなってしまった。

10 それからは時々、庭へ下りる度にわざわざ覗いてみたが、蜂の居ない時はむしろ稀まれであった。見る度に六稜柱の壁はだんだんに延びて行くようであった。

11 ある時は顎の間に灰色の泡立った物質をいっぱい溜めている事が眼についた。そして壁を延ばす代かわりに穴の中へ頭を挿しこんで内部の仕事をやっている事もあった。しかしそれがどういう目的で何をしているのだから自分には分らなかった。

12 そのうちに私は何かの仕事にまぎれて、しばらく蜂の事は忘れていた。たぶん半月ほど経ってからと思うが、ある日ふと思い出して覗いてみると蜂は見えなかった。のみならず巢の工事は前に見た時と比べてちっとも進んでいないようであった。なんだか I が外れたというだけでなしに一種の——ごく軽い淋さびしさといったような心持を感じた。

13 それから後はいつまで経っても、もう蜂の姿は再び見えなかった。私はどうしたのだろうと色々な事を想像してみた。往来で近所の子供にでも捕えられたか、それとも私の知らないような自然界の敵に殺されたのかとも考えてみた。しかしまたこの蜂が今現にどこか遠いところで知らぬ家の庭の木立に迷って、あてもなく飛んでいるような気もした。

14 私は親しい友達などが死んだ後に、独りで街の中を歩いていると、ふとその友が現に④同じ東京のどこかの町を歩いている姿をありあり想像して、云い知れぬ淋しさを感じる事があるが、この蜂の場合にもこれとよく似た幻を頭に描いた。そして強い眩まぶしい日光の中にキラキラして飛んでいる蜂の幻影が妙に淋しいものに思われて仕方がなかった。

15 ある日何かの話のついでにSにこの話をしたら、Sは私とはまるでちがった解釈をした。蜂は場所が悪いから断念して外へ移転したのだろうというのである。そう云われてみればあるいはそうかもしれない。実際両側に広い空地を控

えたこの垣根では嵐が吹き通したり、雨に洗われたり、人の接近する事が頻繁であったりするので蜂にとってはあまり都合のいい場所ではない。しかし果して蜂がその本能あるいは智慧で判断していったん選定した場所を、作業の途中で中止して他所へ移転するというような事があるものか、ないものか、これは専門の学者にでも聞いてみなければ判らない事である。

16 もしSの判断が本当であったとしたら、つまり私は自分の想像の中で強いて憐れな蜂を殺してしまつて、その死を題目にした小さな詩によつて安直な感傷的のジヨウチヨを味わっていた事になるかもしれない。しかしいずれにしても私の幻想を無雑作に事務的に破つてしまつたSに対して、軽い不平を抱かないではいられなかった。そしてこんな些細な事柄にもオプチミストとペシミストの⑥差別は現われるものかと思つたりした。

17 今日覗いてみると蜂の巣のすぐ上には柵蜘蛛が網を張つて、その上には枯葉や塵埃がいっぱいきたなくなつてしまつている。蜂の巣と云いながら、やはり住む人がなくて荒れ果てた廃屋のような気がする。この巣のすぐ向う側に真紅のカンナの花が咲き乱れているのがいつそう蜂の巣をみじめなものに見せるようであつた。

18 私はともかくもこの巣を来年の夏までこのままそつとしておこうと思つている。来年になったらこの古い巣にも、もしや何事が起りはしないかというような予感がある。

寺田寅彦『小さな出来事』より「蜂」(『寺田寅彦全集 第二卷』岩波書店)

(注) \*1 四つ目垣……竹垣の一種。丸太を立て、その間に竹を縦横に渡したもの。

\*2 方三間ばかり……片方が三間(約五メートル五十センチ)

\*3 長子……初めに生まれた子。したがつて最も年長の子。

\*4 さんしち……黄色い花を咲かせ、葉は虫刺されや止血に用いられる。

\*5 蜂窩……蜂の巣。

\*6 六稜柱形……六つに角だつた柱状の形態。

\*7 オプチミスト……物事を楽観的に考える人。

\*8 ペシミスト……物事を悲観的に考える傾向の人。

\*9 塵埃……ちりやほこり

問一 傍線部 a～e の漢字はその読みを平仮名で示し、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 本文中の二重傍線部ア～オの中から形容詞を二つ選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部①に「黄色い強そうな蜂が一匹働いていた」とあるが、働いている蜂の描写がある段落番号を、ここより後の形式段落からすべて答えなさい。その際、数字が小さい順に答えなさい。

問四 傍線部②「こんなところに蜂の巣があつてはあぶないから」とあるが、どのような場所だから「私」は「あぶない」と考えているのか。本文から七字で二か所探し、解答欄に合うように書きなさい。

問五 傍線部③「頭の見えなくなるまで挿し入れた」の「の」と同じ働きを持つ「の」を含む文を次から選び、記号で答えなさい。

ア 雨上がりの虹は美しい。

イ 私の手を持って行きなさい。

ウ 桜の咲くころに来ましょう。

エ 今日は忙しいのです。

問六 空欄 I に入る最も適当な語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 予定    イ 予想    ウ 空想    エ 既定

問七 傍線部④「同じ東京のどこの町」とあるが、蜂の場合において同じ意味にあたる語句を、本文中から十字以内で抜き出し答えなさい。

問八 傍線部⑤「その死を題目にした小さな詩」とあるが、「小さな詩」にあたる表現を、本文中から二十五字で抜き出し答えなさい。

問九 傍線部⑥「差別」のここでの意味を次から選び、記号で答えなさい。

ア 識別  
イ 別使  
ウ 異彩  
エ 差異

問十 傍線部⑦「何事か起りはしないか」とあるが、何が起ると考えているのか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア Sが自分の考えが間違っていたと謝ってくること。

イ 友人が実は死んでいないと知らされること。

ウ Sがほんとはペシミストだったと気づくこと。

エ 蜂が再び巣を造りにくること。

問十一 次の文章の A B に入る最も適当な語を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

この文章のように著者の体験や読書などから得た知識をもとに、それに対する感想・思索・思想をまとめた文章を A という。小説や A を散文といい、それに対して詩や短歌を B という。

ア 物語    イ 説話    ウ 随筆    エ 紀行文    オ 論文    カ 韻文

問一 傍線部 a～e の漢字はその読みを平仮名で示し、カタカナは漢字に直しなさい。  
a すきま b 競 c いちじる d 情緒 e しんく

問二 本文中の二重傍線部ア～オの中から形容詞を二つ選び、記号で答えなさい。  
ア、イ

形容詞は事物の性質や状態などを表す語ということから考える。

問三 傍線部①「黄色い強そうな蜂が一匹働いていた」とあるが、働いている蜂の描写がある段落番号を、ここより後の形式段落からすべて答えなさい。その際、数字が小さい順に答えなさい。  
7、8、9、11

「働いている蜂の描写」という条件がある。「蜂の描写」でも「蜂がつくったものの描写」でもないことを注意する。

問四 傍線部②「こんなところに蜂の巣があつてはあぶないから」とあるが、どのような場所だから「私」は「あぶない」と考えているのか。本文から七字で二か所探し、解答欄に合うように書きなさい。

子供の遊び場所 にもなり 夏の夜の涼み場 でもあるから。

蜂の巣のある場所は「私の家の庭」である。ここから「あぶない」理由となる七文字の語句を選ぶ。

問五 傍線部③「頭の見えなくなるまで挿し入れた」の「の」と同じ働きを持つ「の」を含む文を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 雨上がりの虹は美しい。
- イ 私の手を持って行きなさい。
- ウ 桜の咲くころに来ましょう。
- エ 今日は忙しいのです。
- ウ

「の」は、現代語では「主格Ⅱ」「が」に置き換えられるもの(Ⅰ)

「連体格(Ⅱ)後の名詞を修飾するもの(Ⅰ)

「準体格(Ⅱ)「こと」や「もの」「〜のもの」など、名詞に置き換え可能なもの(Ⅰ)の

3つが主な用法である。

「頭の見えなくなるまで挿し入れた」は「が」に置き換えられる。

問六 空欄 I に入る最も適当な語を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 予定
  - イ 予想
  - ウ 空想
  - エ 既定
  - イ
  - ア 予定 行事や行動などをあらかじめ定めること。
  - イ 予想 ある物事の今後の動きや結果などについてあらかじめ想像すること。
  - ウ 空想 現実ではあり得るはずのないことをいろいろと思いつくこと。
  - エ 既定 すでに決まっていること。
- 「巣の工事は前に見た時と比べてちっとも進んでいない」ことは、「なんだか」予想が外れたというだけではない。「とあてはめてみる」「予想が外れた」という慣用句の問題として考えてもよい。
- 『広辞苑』

問七 傍線部④「同じ東京のどこかの町」とあるが、蜂の場合において同じ意味にあたる語句を、本文中から十字以内で抜き出し答えなさい。

知らぬ家の庭の木立

蜂の場合で「〜の〜の」という構成になっている語句を探してみる。

問八 傍線部⑤「その死を題目にした小さな詩」とあるが、「小さな詩」にあたる表現を、本文中から二十五字で抜き出し答えなさい。

強い眩しい日光の中にキラキラして飛んでいる蜂の幻影

「詩」という条件に合う部分を考える。「妙に淋しいもの」は「私」の思いとなるため入らないことに注意する。

問九

傍線部⑥「差別」のここでの意味を次から選び、記号で答えなさい。

ア 識別

イ 別使

ウ 異彩

エ 差異

エ

ア 識別 みわけること。

イ 別使 ほかの使者。特別の使者。

ウ 異彩 異なった色どり。転じて、他とひどく異なった趣。きわだつてすぐれた様子。

エ 差異 他と比較してのちがいがい。 『広辞苑』

「オプチミスト」である「S」と「ペシミスト」である「私」を比較してのちがいがいと考える。

問十

傍線部⑦「何事か起りはしないか」とあるが、何が起ると考えているのか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア Sが自分の考えが間違っていたと謝ってくること。

イ 友人が実は死んでいないと知らされること。

ウ Sがほんとうはペシミストだったと気づくこと。

エ 蜂が再び巣を造りにくること。

エ

ア、イ、ウのいずれもこの本文だけではわからない。

エは「同じ東京のどこかの町を歩いている姿をありあり想像して、云い知れぬ淋しさを感じる事があるが、この蜂の場合にもこれとよく似た幻を頭に描いた。そして強い眩<sup>まぶ</sup>しい日光の中にキラキラして飛んでいる蜂の幻影が妙に淋しいものに思われて仕方なかった。」という部分から、蜂がどこかにいて来年再び帰ってくることを私は期待していると考えられる。

問十一

次の文章の

A

B

に入る最も適当な語を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

この文章のように著者の体験や読書などから得た知識をもとに、それに対する感想・思索・思想をまとめた文章を A という。小説や A を散文といい、それに対して詩や短歌を B という。

ア 物語

イ 説話

ウ 随筆

エ 紀行文

オ 論文

カ 韻文

A

ウ

B

カ